

新  
にい美  
み南  
なん吉  
きち

そこで、おかしくなつて、笑い出す子もありました。あまりかつこうがよくないので二三歩はしつてみる子もありました。

こんな月夜には、子どもたちは何か夢みたいなことを考えがちでありました。

子どもたちは小さい村から、半里ばかりはなれた本郷ほんごうへ、夜のお祭りをみにゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風にのつて、ひゅうひやりやりやと笛ふえの音ねが聞えてきました。

子どもたちの足はしじんにはやくなりました。

するとひとりの子どもがおくれてしまいまして。  
「文六ぶんろくちゃん、早くこい」  
とほかの子どもがよびました。

月夜に七人の子どもが歩いておりました。大きい子どもも小さい子どももまじつておりました。

月は、上から照らしておりました。子どもたちのかげは短く地べたにうつりました。

子どもたちはじぶんじぶんのかげを見て、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

文六ちゃんは月の光でも、やせっぽちで、色の白い、眼玉<sup>めだま</sup>の大きいことのわかる子どもです。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「んでもおれ、おつ母ちゃんの下駄<sup>げた</sup>だもん」と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとの下駄がはかれていきました。

## 二

と、義則君<sup>よしのりくん</sup>が口をとがらして下駄屋のおばさんにいいました。「こいつのい、樽屋<sup>たるや</sup>の清さ<sup>せい</sup>の子どもだけのい、下駄<sup>げた</sup>を一足やつとくれや。あとから、おつ母さんが錢<sup>ぜ</sup>もつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子どもがよくみえるよう<sup>に</sup>、まえへおしだしました。それは文六<sup>ぶんろく</sup>ちゃんでした。文六ちゃんは二つばかりまばたきしてつつ立っていました。

おばさんは笑い出して、下駄を棚<sup>たな</sup>からおろしてくれました。

本郷<sup>ほんごう</sup>にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子どもたちはその店にはいってゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんにたのまれたのです。

「あののい、おばさん」

どの下駄が足によくあうかは、足にあててみなければわかりません。義則君<sup>よしのりくん</sup>なんぞのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがつてくれました。何しろ文六ちゃんは、ひとりきりの子どもで、甘えん坊<sup>あまぼう</sup>でした。

ちょうど文六ちゃんが、新しい下駄をはいた  
ときには、腰こしのまがつたおばあさんが下駄屋さん  
にはいってきました。そしておばあさんはふと  
こんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩ばんげに新  
しい下駄をおろすと狐きつね がつくというだに」

子どもたちはびっくりしておばあさんの顔を  
みました。

「嘘うそだい、そんなこと」

とやがて義則君がいいました。

「迷信めいしん だ」

とほかのひとりがいいました。

それでも子どもたちの顔には何か心配な色が  
ただよつていました。

「ようし、そいじや、おばさんがまじないして  
やろう」

と、下駄屋げたや のおばさんが口軽くちかる くいいました。

おばさんは、マツチを一本するまねして、文六ちゃんの新しい下駄のうらに、ちょっとさわ  
りました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐きつね も狸たぬき もつきやしん」

そこで子どもたちは下駄屋さんを出ました。

### 三

子どもたちは綿菓子わたがし をたべながら、稚児ちご さんが二つの扇おうぎ を、眼まにもとまらぬはやさでまわ  
しながら、舞台ぶたい の上で舞ま うのをみていました。その稚児さんは、おしろいをぬりこくつて顔を  
いろどつているけれど、よくみると、お多福湯たふくゆ のトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」  
ときさやきあつたりしました。

稚児さんをみてるのにあくと、くらいところにいって、鼠花火をはじかせたり、かんしやく玉を石垣にぶつけたりしました。

舞台ぶたいを照らすあかるい電燈には、虫がいっぱいいきて、そのまわりをめぐつていました。みると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色の蛾ががぴつたりはりついていました。

山車だい

三番霞さんばそう

がおどりはじめるころは、すこし、お宮の境内けいだいの人も少なくなつたようでした。花火や、ゴム風船の音もへつたようでした。

子どもたちは山車の鼻の下にならんで、あおむいて、人形の顔をみていました。

人形はおとなとも子どもともつかぬ顔をしています。その黒い眼めは生きているとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形をおどらす人がうしろで糸をひくのです。子どもた

ちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子どもたちは、なんだか、ものがなしいような、ぶきみなような気がします。

するととつぜん、パクッと人形が口をあきべロツと舌したを出し、あつという間に、もとのよう口をとじてしましました。まつかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやつたことです。子どもたちはよく知っているのです。ひるまなら、子どもたちはおもしろがつて、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子どもたちは、いまは笑いませんでした。ちょうどちようちんの光の中で、——かげの多い光の中では、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロツと舌を出したりする人形：なんというぶきみなものでしょう。

——子どもたちは思い出しました、文六ちゃんの新しい下駄<sup>げた</sup>のことを。晩<sup>ばん</sup>に新しい下駄をおろすものは狐<sup>きつね</sup>につかれるといったあのがあさんのこと。

子どもたちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰つてゆかねばならない、半里<sup>はんり</sup>の、野中の道があつたことにも気がつきました。

切通し坂の上にきたとき、ひとりの子が、もうひとりの子の耳に口をよせて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいって何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子どもたちは何か一つのことを、耳から耳へいいつたえました。

それはこういうことだつたのです、「下駄屋さんのおばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすつておまじないをしやしんだつた。まねごとをしただけだつた。」

それから子どもたちはまたひつそりして歩いてゆきました。ひつそりしているとき子どもたちは考えておりました。

かえりも月夜でありました。  
しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子どもたちは、だまつて——ちようどひとりひとりが、じぶんのこころの中をのぞいてでもいるように、だまつて歩いていました。

——狐<sup>きつね</sup>につかれるというのはどんなことかしらん。文六ちゃんの中に狐がはいることだろうか。文六ちゃんの姿<sup>すがた</sup>や形はそのまままでいて、

心は狐になつてしまふことだらうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんは狐につかれているかもしないわけだ。文六ちゃんはだまつているからわからないが、心の中はもう狐になつてしまつてゐるかもしないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、だれでもおなじようなことを考へるものです。そこでみんなの足はしじんにはやくなりました。

ぐるりを低い桃の木でとりまかれた池のそばへ、道がきたときでした。子どもたちの中でだれかが、「コン」と小さい咳せきをしました。

ひつそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子どもたちは、いまの咳はだれがしたか、こつそり調べました。すると——文六ちゃんがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのでないかと子どもたちは考えました。よく考えてみるとそれは咳せきではなくかったようでした。狐きつねの鳴き声のようでした。

「コン」

とまた文六ぶんろくちゃんがいいました。

文六ちゃんは狐になつてしまつたと子どもたちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はいつていると、みんなはおそろしく思いました。

樽屋

たるや の文六ちゃんの家は、みんなの家とはす

こしはなれたところにありました。ひろい、み

かん畑になつている屋敷にかこわれて、一軒き

り、谷地にぽつんと立つていました。子どもた

ちはいつも、水車のところからすこしまわりみ  
ちして、文六ちゃんを、その家の門口まで送つ

てやることにしていました。なぜなら、文六ち

ゃんは樽屋の清六さんひとりきりのだいじな

坊ちやんで、甘えん坊だからです。文六ちゃん

のお母さんが、よく、みかんやお菓子をみんな

にくれて、文六ちゃんと遊んでやつてくれとた

のみにくるからです。今晚も、お祭にゆくとき

には、その門口まで、文六ちゃんをむかえにい

つてやつたのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところにき

ました。水車の横から細い道がわかれて草の中

を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんの家  
にゆく道です。

ところが、今夜はだれも、文六ちゃんのこと  
をわすれてしまつたかのように、送つてゆこう  
とするものがあります。わすれたどころでは  
ありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつも

親切な義則君だけは、こちらへきてくれるだろ  
うと思つて、うしろをむきむき、水車のかげに  
なつてゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといつしょにゆ  
きませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとりで、月にあかるい  
谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。

どこかで、蛙がくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、  
もうじきだから、だれも送つてくれなくても、

困るわけではないのです。だが、いつもは送つてくれたのです、今夜にかぎつておくつてくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちやんと知つているのです、みんなが、じぶんの下駄げたのことでなんといいかわしたか、また、じぶんが咳せきをしたためにどういうことになつたかを。

祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄げたをはいて狐きつねにとりつかれたかしれないために、もうだれひとりかえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなきれないのでした。

義則君よしじのりくんなんか文六ぶんろくちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着てある羽織はおりをぬいでかしてくれたものでした（田舎いなかの少年

は寒い時、洋服の上に羽織を着ています）。それだのに、今夜は、文六ちゃんが、いくら咳せきをしていても羽織をかしてやろうとはいませんでした。

文六ちゃんの屋敷やしきの外がこいになつていてのいけがきのところにきました。背戸口せどぐちの方の小さい木戸を開けて中にはいりながら、文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師かげぼうしを見てふと、ある心配を感じました。

——ひよつとすると、じぶんはほんとうに狐きつねにつかれているかもしれない、ということでした。そうすると、お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした。

お父さんが樽屋さんたるやの組合へいって、今晚こんばんはまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさきにやすむことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといっしょにねるのです。ひとり子こですからしかたないのです。

「さあ、お祭の話を、母ちゃんにきかしておくれ」

とお母さんは、文六ぶんろくちゃんのねまきのえりを合わせてやりながらいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画えいがを見てくれば映画

のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手ですから、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さんは、とてもおもしろがつて、よろこんで文六ちゃんの話をきいてくれるのでした。

「神子さんみこね、あれよくみたら、お多福湯たふくゆのトネ子こだつたよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、といつて、おもしろそうに笑つて、「それから、もうだれが出たかわからなかつたとききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼めを大きくみひらいて、じつとしていましたが、やがて、祭の話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄げたおろすと、狐きつねにつかれる？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思つて、しばらく、あつけにとられて文六ちゃんの顔をみていましたが、今晚こんばん、文六ちゃん

の身の上に、おおよそどんなことが起こったか、とお母さんがききかえしました。

「だれがそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになつて、じぶんのさきの  
問い合わせをくりかえしました。

「ほんと？」

「嘘だよ、そんなこと。むかしの人がそんなこ  
とをいつただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きっとだね」

「きっと」

しばらく文六ちゃんはだまつていきました。だ  
まつているあいだに、大きい眼玉<sup>めだま</sup>が二度ぐるり  
ぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとだつたらどうする？」  
「どうするって、何を？」

「もし、ぼくが、ほんとに狐<sup>きつね</sup>になつちやつた  
らどうする？」

お母さんは、シンからおかしいように笑いだ  
しました。

「ね、ね、ね、」

と文六ちゃんは、ちよつとてれくさいような顔  
をして、お母さんの胸<sup>むね</sup>を両手でぐんぐんおし  
ました。

「そうさね」と、お母さんはちよつと考えてい  
てからいいました、「そしたら、もう、家にお  
くわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つ  
きをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

鴉根山<sup>からすねやま</sup>の方にゆけば、いまでも狐<sup>きつね</sup>  
うだから、そつちへゆくさ

「母ちゃんや父ちゃんはどうする？」

するとお母さんは、おとなが子どもをからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、

しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあい

い文六が、狐になってしまったから、わしたちもこの世になんのたのしみもなくなってしまつたで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、ふたりで、明日の晩げに下駄屋さんか

ら新しい下駄を買ってきて、いつしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根

の方へゆきましょう」

文六 ちやんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根つて、西の方？」

「盛岩 から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木が生えているところだよ」

「獵師りょうしはいない？」

「獵師りょうしつて鉄砲打てっぽううちちのことかい？ 山の中だから

「獵師りょうしが撃うちにきたら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞穴ほらあなの中にはいって三人で小さくなつていればみつからないよ」

「でも、雪が降ると餌えきがなくなるでしょう。餌をひろいに出たとき獵師の犬にみつかつたらどうしよう」

「そしたら、いつしょにけんめい走つてにげましよう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんははやいでいいけど、ぼくは子どもの狐きつねだもん、おくれてしまふもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱつてあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろにきたら？」

お母さんはちよつとだまつていました。それから、ゆっくりいいました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆつくりいきましょう」「どうして？」

「犬は母ちゃんにかみつくでしよう、そのうち**りょうし**に**猟師**がきて、母ちゃんをしばつてゆくでしょう。そのあいだに、坊やとお父ちゃんはにげてしまふのだよ」

**ぶんろく**文六ちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじとみました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじや、母ちゃんがなしになつてしまふじやないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆつくりゆくよ」

「いやだつたら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじやないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆつくりゆつくり……」

「いやだつたら、いやだつたら、いやだつたら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの**むね**胸にしがみつきました。**なみだ**涙がどつと流れました。

お母さんも、ねまきのそでこつそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんがはねとばした、小さい枕まくらをひろつて、あたまの下にあてがつてやりました。

「 狐 」

※ 底本 新装版 新美南吉童話集  
2 『おじいさんのランプ』 ( 2012  
年 大日本図書株式会社 )

※ このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。

(TEL : 0569-26-4888)